

《佐々木 慈瞳》氏

「いのちのおわりのつづき」

セイコさんの物語

きょうはお寺の話ではなくて、私がホスピスのある病院で出会った人のお話をしたいと思います。

セイコさんは私が初めて出会った患者さんです。スピリチュアルケアのため初めて病院に行きましたが、どうしていいかわからず、所在なげにしていると、セイコさんが私に声をかけてくれました。「慈瞳さん、時間があるなら私の部屋にいらっしやい。」

セイコさんはお孫さんが来るのを一番楽しみにしていました。富士山のそばにある別荘に子どもたちと一緒に行くという話も聞かせてくれました。私がセイコさんと出会ったのは6月ですが、セイコさんはその年の1月にこんな手紙を息子さんに渡していました。「葬儀は密葬でお願いします。祭壇は要りません。周りに花でも置いてくだされば結構。八王子の庭と別荘に散骨してください。家の中で仏壇に収まるのは好みません。だから、墓も仏壇も要らない。以上、大変お世話になります。お手数かけますが、よろしくね。」

10月になって、セイコさんから「私、密葬でと頼んでいるけど、お葬式をしてもらうなら慈瞳さんがいいな。」と言われました。うちのお寺には檀家がないんです。檀家がないということはお葬式がないということで、私はお葬式をしたことがなくて、住職にいっぱいだめ出しされながら、随分稽古しました。そして、初葬式。セイコさんのお葬式をしました。散骨にも一緒に行きました。

セイコさんに出会っていなかったら、私は多分今ここにいません。どうしていいのかわからないというときに、セイコさんが私に導きをくれました。セイコさんが亡くなってもう随分経つのですが、こうやって毎回私はセイコさんのお話をします。本当に命が終わっても終わらないという私の中での一番最初がセイコさんです。今もこうやって導いてもらっているのだなと思います。

マサコさんの物語

ある秋、マサコさんと初めて会ったときにお孫さんの話を聞きました。「北海道に住んでいる2人姉妹で、温かい心を持った、とてもすてきな孫なんです。その孫に、たぶん最後になるかなという手紙を書いたんですよ。」それを聞いて私は、「だったらプレゼントも添えませんか。」と提案し、きらきらのビーズでプレスレットと一緒に作りました。

そして、翌年の5月。マサコさんが3度目のホスピス入院となったとき、私が談話室にいたら、ご主人が来て「僕にもあれ、作れますかね。あの腕につけるあれ。」と言われました。ご主人は、私が手伝うと言うのを断って、自分一人で奥さんのプレスレットを作りました。「もうじき母の日だし、ラブレターを添えてプレゼントしたらどうですか。」と提案すると、「そうか、手紙か。書こうかな。」と言われました。

そして、母の日。北海道のお孫さんも来ました。家族みんなが集まって、ご主人が手紙をマサコさんに渡したそうです。私は仲のいい家族だなと思っていたのですが、実はそうではありませんでした。マサコさんは仕事をずっとして、とても人望があって、業績も上げました。しかし、それを労わなかったお父さんの姿を子どもたちが見ていて、お父さんのことを許せないと思っていたらしいです。一番そう思っていた長女さんが言うには、お父さんの手紙は詫言状だったのです。

マサコさんは生前、「自分が亡くなったら家族はみんな悲しむと思います。家族は悲しむけど、その向こう

には希望があるんです。」と私に話してくれました。「希望ですか。」と言ったら、「そう、家族の再生が始まるの。それが希望。悲しみの向こうには希望があるのよ。」と答えてくれました。まさに今、このときもマサコさんの希望が実現している一コマなのかなと思っています。

日本人が最期に大切にしたいと考えていることは、自分らしく生きて、生き切る、最期まで自分らしくあるということかと思います。でも、病気になって入院したりすると、まず病気を治すことを優先して、自分らしさとか、やりたいことは病気が治ってからやりましょうよということになります。そんなところに私みたいな人が行くわけです。患者さんは、今さら面倒なことを聞かれても困る、勘弁してほしいながらも、仕方なく「私ね、どこかで生まれてね。」と語り始めます。そのライブレビューに私がひょいっと乗ると、自分の思いをこんなふうに話してもいいんだと気づいて、何でも話せるようになります。私は医療者ではないので、病気の話以外のこと、その人の話したいこと、人生のこと、生き方のこと、そんなところに触れることが多いです。

命をわけてあげた木

母の日の 10 日ほど後にマサコさんは亡くなりました。秋にマサコさんの家にお線香をあげに行ったら、ご主人が「中 2 の孫が作文を書いたんですよ。」と言って見せてくれました。5 月におばあちゃんと別れて、その後書いた作文、それは「命をわけてあげた木」という題でした。

「(要約) 雪深い山奥に立っているその木は年老いていて、もう葉をつけることはありません。しかし、その木の幹に鳥が虫を捕るために開けた無数の穴が小さな生き物たちのすみかとなり、それを食料とする動物たちをも助け、時に子育ての場所となり、たくさんの命がつながる場所となっています。そのようにして、その木は様々な形で命をわけてあげています。今日も静かにあの山のあの場所に立っています。朽ちて倒れるまで、たくさんの生き物たちに命をわけ与え続け、倒れてからも土に返り、次に生まれる新たな命の支えになるのです。いつか姿が消えても、あの木は伝え続けてくれるでしょう。今、ここに生きているもの全てが命をわけてもらい、命をわけてあげて生きているということ。今、ここに生きるもの全てに通ずる『命のつながり』があるということ。」

私たちがいる場所は、もしかしたら別れの場所であるかもしれませんが、別れの場所は終わりの場所ではなくて、命が終わっても、終わった命は続いていくんだということを本当に思いました。今日はこの話がしたかったのです。今日のような場面に出会えたことを本当に感謝しています。